
アラストル

GRAM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アラストル

【Nコード】

N2614C

【作者名】

GRAM

【あらすじ】

「便利屋」として界限に名を馳せる少女、アルス。巨大な剣を背負い、今宵も彼女は魔を狩る。女の子と銃器と剣とアクションが好きな人向けです。ご意見、感想、お待ちしております。

#001.. Agreement (前書き)

女の子と剣と銃とアクションが好きな人向けです。

#001.. Agreement

私はそこで目が覚めた。

体を引き裂かれた激痛、暗い影が迫ってくる恐怖、そして、全てを失う喪失感。今さっきまで感じていたはずのそれらは、目が覚めたときには全て感じられなくなっていた。

夢……？

とても、とても怖い夢だった。

現実には絶対にありえないことばかりで、変な生き物が襲ってきた……何が何だか分からない夢だった。

それにしてもここは暗い。目を開けているのに何も見えなくて、ただ暗い闇だけが私を包んでいる。

……何だろう、すごく気持ち悪い。

体中をジメジメしたモノがまとわり付いている。きっと気持ち悪いのはこれのせいだ。

そうだ、起きなきゃ。起きて電気を点けて、点けて……。

あれ……布団が重い。これじゃあ起きれないよ……体が、動かないよ……！

ここ何処？私、何処で寝ているの？ここって私の家だよね？誰も

居ないの？お母さんもお父さんもお姉ちゃんも、居ないの？

気持ち悪い…嫌だ、こんなところ、居たくない。早くみんなに会いたい…

きっとこれも夢なんだ。よく分からなかった夢の続きなんだ。だから、早く終わってよこんな夢。早く起きて。早く早く…！

ただそこでじっとしたまま私は私に叱咤を飛ばしていた。その時、

——ほう、肉体は喰われても、魂だけは守り残していたか

誰だか分からない男の人の声が聞こえた。

…誰？

——我が名はアラストル。お前は魔界の者に肉体を喰い尽くされ、残ったお前の魂もこの魔界に飲み込まれたのだ。そして、その魂もまた、闇に喰われようとしている。

何言ってるの？これは夢でしょ？だから私は死んでなんか…

——違う。お前の肉体は既に滅んだ。これも夢ではない。

嘘。

——事実だ

嘘だ！だって私……

——現世に存在していたお前は、もう死んでいる。

じゃあ、あの夢は…夢じゃなかった…？

途端に寒気がしてきた。

あの時、あの瞬間、溢れかえる血色に染まった私の体。引き千切られ、碎かれ、租借される私の体。鮮やかな血の赤と中から露出した白い骨のコントラスト。

走馬灯のようにあの瞬間が駆け巡る…ううん、きっとこれは走馬灯なんだ。だって私は……

そこまで考えて、今度は寒気とは別のが私を襲った。ただ事実を受け入れたくない我儘な否定。

嫌だ、嫌だやだやだ！まだ死にたくなんかない！

——今、我と契約すれば現世へ復活できるが、どうする？

生き、返る？私が？

——そうだ。過去を捨て、我のために働いてもらう。

それで、みんなに会える？

——違う。過去を捨てる、そう言った筈だ

嫌だ…！

——勘違いするな。お前の選択肢は一から生きるか、ここで死ぬ

か、
だ

………生き、たい…

——契約は終わった。

次の瞬間、私は光に包まれ、意識を無くした。

#001.. Agreement (後書き)

まだまだ序盤です。感想、ご意見などお待ちしております。このタイトルどこかで見た聞いた！なんてご意見はご遠慮ください。本人も分かっています……。

#002.. Sweeping

「よおアルス。小娘の分際でこの業界に入ったのが運の尽き、だな」
脂ぎった中年男の声が裏路地に響き渡る。

その声は、同じ裏路地にたたずむ一人の少女に向けられていた。

「……それさあ、もう聞き飽きたよ。もっとバリエーションを増やすんだね」

面倒くさそうに、アルスと呼ばれた少女は声の主を見上げた。

漆黒の闇に溶けるような黒髪が湿った風になびく。

白いTシャツに色あせたジーンズと、至って簡素な服装をした少女に向かってその声の主は、不快感を露わに答えた。

「そんなの知ったこっちゃねえな。分かってるのは、今日がお前の命日だって事だ」

その言葉に合わせて肥満漢の腕が持ち上がる。地面から水平に上げられた手には、この男の自信の源なのだろう一丁の拳銃が握られていた。

「その台詞は確か…四十と三回だったかな。まあどっちにしたって、ベタな台詞だよね。」

呆れた様子で肩をすくめるアルス。暗い銃口に捉えられているにも拘らず、余裕綽々な態度を見せるのはただの酔狂か、あるいは

.....。

主人の感情を表すように、少女へ向けられた銃口はブルブルと震えだした。

「黙りやがれ!!」

眉間に大量の皺を刻み、こめかみには青筋を浮かべて肥満漢は叫んだ。

「いくらお前がお喋りを止めねえ小娘でもな、これを見ればその減らず口も叩けるかってんだ!」

その声を合図に彼女を囲む路地の建物、窓、屋上、様々な場所から武装した男たちが湧いて来た。そして、それぞれの獲物を一斉にアルスへと向ける。

同じくその輪の中心に位置している肥満漢は勝ち誇ったように下品な笑いを彼女へ飛ばした。

金さえ積みば殺しを厭わない、そんな連中が吐いて捨てるほどいるご時世だ。

「どうだ。お前の首欲しさに集まった奴らだぜ? いくら人一倍頑丈なお前でも、これだけの鉛弾を喰らったことはないだろ?」

渦のように殺気が中心の少女一点へ集まる。時刻は夜明け前、街が静寂に包まれるにつれて、少女を取り囲む集団のテンションは最高潮へと向かっていった。

その中、アルスはただ黙ったままだ。

「どうした? ビビッてトイレでも探してるのか?」

「ンなわけないっしょ」

肥満漢の唱えた軽口をようやく口を開いたアルスは、もう話すのも面倒くさい、とでも言いたいように返した。倦怠感が漂うその態度は、今まで昼寝でもしていたかのような悠長さである。

「コルトの小言と愚痴聞かされてこっちは疲れてんのよ。早く帰って寝たいの。分かる？」

「……ああ、分かったぜ。それなら――」

青筋を浮かべた表情のまま肥満漢はトリガーに指をかけた。

「こいつで目え覚ましな！」

直後、銃声が響き渡った。

肥満漢の手中から放たれた弾丸は正確に少女の眉間へと吸い込まれていく。

その殺意の塊が彼女に当たったかどうか、そんな分かりきったことを確認する間もなく、周りにいた手勢が一斉射撃を始めた。たちまち辺りは着弾した衝撃で舞い上がった土煙に包まれ、その中に混じって火薬特有の硝煙臭が漂う。

それぞれの持つ獲物の弾が尽きるまでの掃射。

わずか数秒足らずで各々手持ちの残弾は尽きた。

しかしヒト一人殺すのに、ましてや歳が20も行かない小娘を殺るためにはこの数秒間は十分すぎるだろう。

「いい感じのシャワーだろお？ ちったあ目が覚めたか？」

肥満漢は満面の笑みを湛えながら余裕に台詞を吐いた。辺り一帯を囲んでいた手勢たちも、各々勝利の手応えに歓喜を噛み締めながら土煙が晴れるのを待つ。中にはもう既に一仕事終えた気分のままこの場を去ろうとしている輩もいる。

やがて間を置かずして立ち込めていた土埃が晴れていく。そして、

「言ったでしょ？」

土煙の向こう、ほんの数秒前までと変わらず立ち続けている彼女の姿——かどうか、肥満漢にはそれが確認できなかった。

見えたような見えなかったような。やや薄れてきているものの、依然として土煙が立ち込めている。

今見た白いTシャツは果たして誰のなのか。それは幻覚なのか、だとしたら今聞こえたのは？ 幻聴か？

否定する間もなく――

「『早く帰って寝たい』って」

風が疾る。

「う、うわっ！」

慌てて獲物を構えなおそうとした一人が派手に空中へ弾き飛ばされる。

彼を筆頭に次々と情けない悲鳴が裏路地に響きわたった。その中、未だに晴れようとしなない茶色い土煙に紛れて目立つ白色の何かが高

速で通り過ぎていく。

「て、てめえら！何のために雇ったと思ってんだ！ちゃんと給料分働けっの！」

彼の周りにはもう悲鳴と恐怖の混沌である。

その中心に位置する肥満漢はとにかく白いTシャツを見た空間に向かって、または自分の勘を頼って、拳銃を乱射しだした。運悪く流れ弾に当たった数名が悶絶してアルファルトに沈む。

しかし、その中に彼の目当ての人はいない。

（クソ、くそくそ！これじゃあ、いつものパターンじゃねえか！）

逃げ場なし。加えて合計50の兵隊の一斉掃射。

いくら頑丈と思い知らせているアルスでも、これには耐えられるはずがない。と、思っていた。

脂汗を顔面から滴らせながら肥満漢は狼狽する。挑み、負け、挑み、そして負け続けた彼が必死になって編み出した勝利の方程式が、今崩れたのだ。

やがて湧き出てきた恐怖が彼の精神を狂わせる刹那、目の前に何か着地するような音。ステップでも踏むような軽やかにアスファルトを踏みしめる音が彼の耳に届いた。

恐怖が歓喜へと変わる。

その音の主がアルスとは限らない。確証も根拠も無い、しかし彼には目の前にアルスがいるという絶対的な自信があった。

姿など見ている暇など無い。肥満漢は音のした方へさらに銃弾を放つ。

だが、銃声が轟くとともに聞こえたのは肉を穿つ音でも、少女の悲鳴でもない、何かを激しく打ち付けた金属音だった。

「？」

困惑したまま土煙が晴れる。刹那彼の目に飛び込んできたのは不敵に微笑む少女の顔。

「！ な、な、なな——！」

「おや？ お喋りが苦手なら、家に帰ってABCからやり直すんだね」

余裕たっぷりの言葉。しかし肥満漢の視線は彼女ではなく、彼女の手中にあるものへと注がれる。

見る者を圧倒するかのように長大な重量感を醸し出す、何か冗談めいたものを感じるようなほど巨大な剣。刀身は彼女の半身を軽く凌駕し、銀色の輝きを放つ長剣は視界の悪い土煙の中でも確かな存在感を放っている。

そして彼女はその長剣を逆手にもったまま体をガードしていた。あの何も見えない土煙の中、彼女はその剣一本で銃弾を跳ね返したとでも言うのか。

「覚悟は、できてるね？」

目の前で少女が相変わらずの調子で嘲笑う。

刹那、彼の視界に彼女の拳が迫った。

便利屋、と呼ばれる職が裏社会にはある。

いつ、誰がなぜ彼らのような仕事を持つ者を便利屋と称したのかは、今となっては誰も分かるはずのないことだが、確かに彼らは便

利屋と呼ばれ、自らもそう名乗る場合すらある。

ただ便利屋と言えば裏社会においては雑多な、表沙汰にはしたくない汚れ仕事を任せられる職業であり、いわば便利屋は下っ端的な存在だ。

しかし、そんな地位の低いはずの彼らの発言力が、この界限では日増しに強まっている。

仲介屋を通して、本来は押し付けられる仕事を依頼という形で自らで選ぶというスタイルが定着しつつあった。

それは新たな便利屋としての在り方が根付いた証でもある――

#003.. Overhelm-A

ショートタング、という、表通りから抜け道を四本ほど入った場所
所に位置する酒場。

それなりにうまい酒と料理を提供し、価格もおよそ庶民の相場と
そう変わることは無い、いかにも一般的な酒場。その店の、コルト
という女主人が出す料理も定評を持ち、メニューもまた定番的な酒
のつまみからケーキ類と幅が広い腕前を持った主人である。

毎晩のように酒を求め、騒ぐ店内はなかなか大盛況な喧騒であり、
その喧騒は外に漏れることもしばしばだ。同様に喧騒にはしばしば、
銃声も混ざることもある。

明らかに一般客お断り、そんな雰囲気を出しているのがこの店、
ショートタング。

しかし、そんな店の看板をくぐり、硬い檜の木で出来たドアに手
を掛ける青年が一人いた。

青年が店に入ると、すでにドアを開ける前から聞こえていた喧騒
がさらに濃密な音の奔流となって耳に入ってくる。

「さあさ、今日は20ドルから競るぜ！興味あるやつは来てくれ！」
「危険手当込みで3000ドル！命知らずは集まった集まった！！」
「銃を使えるだけが条件だ。さあどうだ？」

さして広いとも言えない店内で競うように声を張り上げる仲介屋
たち。証券市場さながら彼らを便利屋の集団が囲んでいた。

青年は入り口でその光景を一通り見回すと、店の中心に向かって
歩き出した。

やがて中心、カウンター席にたどり着くと青年は椅子に座った。

「コルトさん、ビール」

食器を洗っていた店主、コルトは呼ばれた声に気づいて顔を上げる。

一旦蛇口を止めると食器棚からジョッキを出し、そこへ冷蔵庫から瓶を取り出して中身を注いだ。

「あいよ。ビールお待ち」

「うい。今日もまた賑わってるな、コルトさん」

「まったく、こっちはいくら働いても貧乏から抜けられないのに、不況知らずなことだよ」

「貧乏は俺も同じさ」

「ああ、確かにここでビール頼むのは、ウィル、あんただけだよ」

コルトはやや呆れ気味とうか、こっちは客だというのに少々見下したような目でウィルを見る。対するウィルはそんなコルトの視線を流しながらジョッキをあおった。

そんなウィルは周りから見ると少し浮いていた。

若いのだ。未成年とはいかなくとも歳が二十を過ぎたばかりというだけあって、その若さからくる気力に満ちていた。

しかし、そんな彼の腰にはパイソンが吊るされているあたり、便利屋という荒事に身を置いているを物語っている。

メニューの書かれたボードの隅に小さく乗せられた「ビール」という文字。屑ポップで作られたそのビールはこのメニューで最も安価であり、味も相応のものだ。苦味だけは本物以上の不人気な酒である。

「俺だってこんなシヨボい酒はさすがシラけるよ。もう少しくらい余裕があればひとつ上のサワーくらい……トホホ」

ビールの味か、または懷の寂しさからか、苦渋の表情をするウィル。なんだか彼の体からは苦勞が勝手に滲み出ているような気が、コルトにはした。

「ま、早いところ仕事にありつくことさね。」

「ああ、それはもう取ってきてあるんだ。ただ、これがまた御指名ってやつで――」

「アルなら今日も来てるよ。またいつもの席さね。ただ、今日は機嫌がよくないみたいだけど。」

そうか、とウィルは頷いてカウンター席から立つ。そしてコルトの言われた通り店の奥、天井からの照明が微妙に届かない薄暗いテーブルに行くと、そこにお探しの人物はいた。

Tシャツにジーンズの簡素な服装、闇に溶けるかのような黒髪、普段は必要以上に存在のオーラを放つというのに、なぜか今は見落としてしまいそうなほど彼女の存在は希薄だった。

近付いていくにつれ、その正体は良く分かる。妙に静かかと思ったらそのお子様はどうやらお食事中だったらしい。

「よう――」

「コルトー！チーズケーキ追加ー！」

ウィルの声を完全に無視して、アルスはカウンターに向かって叫んだ。

話しかけた側は出鼻をくじかれる形で一瞬言葉を切り、やがてため息をついた。

そして呆れていることを相手に分からせるため、ワザとらしく双肩を落としながら少女の向かいに座る。

「相変わらず、だな」

「何その言い方」

ついて出たウィルの言葉に、アルスはむっと眉をしかめた。しかし、そんな彼女でも、彼が話しかける前までの嬉々としたようにチーズケーキを頬張っている姿を見ると、少しは年相応の幼さを見出せるかもしれない。

あの長剣は、傍らの壁に立てかけられていた。

「またあのデブとやり合っただろ？あの野郎、あちこちで騒ぎ回ってたぜ」

「だってさー、しつっこく付きまどってきてさー、喧嘩売ってきてさー、あっちは40人いてさー、だからブツ飛ばしてやった」と、口を尖らせ怠そうに話すアルス。

「なら満足なんじゃねえのか？」

「おかげで寝不足」

そのまま一方的に話すと、ぱたん、とテーブルに突っ伏してしまった。

「ま、それはそうとアルー」

「――断る」

まだ言い終わらないうちにアルスは突っ撥ねた。

「……まだ何も言ってないだろ」

「気分乗らない」

「またそれか……せつかく仕事持ってきてやったのによ！」

「だって眠いんだもん、ハラペコだもん、何よりする気になれないんだもーん！」

バタバタとテーブルの上で駄々を捏ねるアルス。これでは子供、それも小学生低学年くらいのと大差ない。

そこへ、ウィルに助け舟が来た。

「あいよ。チーズケーキ追加」

もそり、とゾンビのような動きでアルスが起き上がる。

「ダメだよ好き嫌いは。ママに教わらなかったのかい？」

コルトはアルスの前に皿を置きながらそうアルスを叱った。
対するアルスは平然とした様子で首を振りながら、

「いやいや、あたし好き嫌いとかないし」

「ま、あれだけデカイ剣なんて振り回してりゃ、それも当然か」

「俺はニンジンやピーマンの同類かよ！？つかコルトさん、それフオローのつもりか！？」

ウィルのツツコミを気にした様子もなく、アルスは嬉々とした表情で目の前に出された新たなチーズケーキをフォークにブツ刺した。
そして口にフォークを持ってきた時、

「ところでツケだけど」

「うぐっ……………」

コルトが唐突に口を開いた。食べかけたフォークの動きが一瞬、止まる。

「ゴ、ゴメーン、実は今週ピンチでさあ」

「またかい？まったく、このどうしようもない小娘が私に三ヶ月もツケさせてると思うとウンザリするねえ」

「来週！来週には払うから、ね？」

胸の前で手を合わせて首を前へ傾げるアルスにコルトは肩をすくめた。

このチャンスをウィルは見逃さなかった。

「ツケ、払えるぜ？」

「マジッ!？」

この声にさっき言った言葉も忘れてアルスがテーブル越しにウィルに詰め寄る。

内心、ウィルはガッツポーズした。

アルスはこの裏社会ではある意味、有名人だ。未成年の少女で便利屋をやっているのも理由の一つだが、この現代に長剣で稼いで請ける仕事は月に一度あるかないか、というところだった。

アルスは気まぐれな性格で気分が乗らなければどんなに金を積まれても承諾しない以外は、成功率100%の凄腕便利屋である。

「よっしゃ、じゃあ明日のいつもの時間、ここで待ち合わせ」

一気にビールを口に流し込むとウィルは席を立った。

「わかった」

アルスは短く返すとまた嬉々とした表情でチーズケーキを頬張る。
その姿はまだ幼さが残る子供のものであった。

その時、

「知ってるか？幽霊ストリートの噂」

そんな声が隣のテーブルで世間話していた便利屋たちから聞こえてきた。

まだ顎を上下させたまま、アルスがその声のした方へ頭だけ振り返る。

「なんでもよ、そこを通った奴あ全員その日から帰って来ないんだってよ」

ピクツ、とアルスの片方の眉が上がる。

彼女は椅子ごとその便利屋たちの方を向くと、不敵に笑ってみせた。

「へえ、面白い怪談してるね？聞かせてよ、それ」

#004.. Overhelm-B

夜も更け、人々の通りが消えた道をアルスは歩いていた。背中には重量感をたっぷり放つ長剣が紐で縛られている。

「この辺、か……」

ふと立ち止まり、一つの路地を見つめる。その路地は三階建ての建物間にあるなんの変哲もないただの路地だった。

街灯もない真っ暗な闇が、その路地の向こうまで続いている。

「確かに怪しいわね、それに」

——うむ、奴らの気配も感じる。

アルスのつぶやきに、誰かが答えた。アルスに周りにはヒト一人、ネズミすらいない。

「全く、こっちの都合ってのも考えて欲しいわ。結局今日もコルトと揉めちゃったし」

——昨今の会話から察するに、それは『ツケ』が原因と思えるが？
「う、うう………ニンゲンの世の中だって色々大変だよネ？
アタシニハワカラナイヨ」

——否。人間社会に馴染みやすいように、お前を憑依ヨリシロとしたのだ。
今更言い訳などできるものか。

「……………ハイハイ。あたしが悪うござんしたよ」

肩をすくめ、諦めたように首を振るアルス。

その様子に背の長剣は、うむ、と頷いた。（実際は声だけだが）

「今回も、雑魚ばっかみたいだね」

目を細め、闇の奥を凝らしていた彼女が言った。

——爵位を持つ者が来ればそれこそ、気配で分かる。ここまで接近せねば気づかぬ程度……下位中の下位。どれも徒党を組まねば戦えぬ輩ばかりだ。

「ハッ」

長剣の言葉を、少女は鼻で笑った。

「その程度の連中で、あたしがくたばると思う？」

——……否。

「んじゃ、行きますか」

再びアルスは歩き出した。延々と続く闇に向かって

#005.. Overhelm-C

「おー、居る居る」

路地に入るなりアルスは大きく驚いた様子もなく声を上げた。

どこからともなく腐敗臭が漂ってくるが、死体はどこにも見当たらない。

「さてと、」

背中の長剣を抜くと、奥のさらなる闇に向かって叫んだ。

「これからアンタらを狩る！！最後に土産の一つでも持つときな！！」

ねっとりとした、生温かい風がアルスの体を撫でる。

刹那、

オオオオオオン……

この世の物ではない、何かの遠吠え。異形な者どもの叫びが闇の淵から轟く。

間をおかずして、気配が彼女の周りを蠢きだした。

哀れな少女の命を、値踏みでもしてるのだろうか。

渦中のアルスは不敵にもニヤリと唇を曲げた。

「さあ、とつとと元の世界に帰ってもらおうよ！」

気合の言葉とともに長剣を握る手に力が込める。

長剣から突然、青白い光が生まれアルスの腕を伝って全身を包み込んだ。

そして、何も前触れもなしに突然、剣を横に振るう。

ただそれだけである。しかし何も無いはずの空間に亀裂が走ると、

オオオオオン……

先程聞こえた遠吠えが響いた。

だが、それは遠吠えと言うより悲鳴と言った方が適切であろうか。そして亀裂から影のような物体浮かび上がり、どす黒い液体を上げて消え失せた。

ブン、とアルスは刃に付着した血を払う。まるで重さを感じさせないアルスの動作に、一瞬、影たちが動揺したのが見えたような気がした。

だが、それはありえない。ありえないのだ。

人外の世界から来た異形の化け物どもは恐怖を感じるような心は、備わっていないはずである。

「ほらほらっ！ かかってきなって！」

さらに一閃、今度は真上から刃を叩きつけられ、影が真っ二つに裂かれて潰れた。

闇が包む路地で唯一の光は、彼女を取り巻く、青白い電撃のみである。

最早、ここからは一方的な殺戮だった。

途中にも数匹が爪を振るい彼女に仕掛けるが、

「遅い！」

あの、昨日の裏路地で見せた軽やかなステップで、彼らの攻撃を容易くかわしてしまう。

そしてお返しとばかりに一太刀。襲ってきた影たちが、まとめてこの世から消え失せた。

奴には敵わない……。消される……。圧倒すぎる……。

悲鳴にも似た、そんなつぶやきが影たちから発せられた。
そんな中、

「いいねえ、悪い気分じゃないな」

再び、ニヤリとアルスはその影たちに向けて笑ってみせる。

そのまま彼女は腰を落として姿勢を低くすると、長剣の切っ先を前へ向けた。

同時に全身のバネを使って神速の踏み込み、長剣の力を解放する。ゆうに5ヤードは一瞬にして踏み込んだ先には、突きによって串刺しにされた影が吹っ飛ばされながら消え失せた。

着地と同時に、アルスを取り巻いていた青白い電撃が消える。

それを見た影たちが一挙に爪を、牙をアルスの背中に向けて突き立てた。

彼女の体に、一瞬にして数十もの切っ先が突き刺さる、かに思われた。

「背中しか狙えないチキン野郎に、あたしの首はやれないね」

彼らがアルスに触れる直前、彼女はくるりと振り返った。
何故か少女は満面の笑み。

わずか一瞬のやり取り。異形の者どもは、彼女に構うことなく爪をアルスの体に突き立てた。

「ガッ！」

少女の表情が驚きで固まる。
突き刺さった爪は背中を突き抜け、血飛沫を路地の壁に塗りたくった。

オオオオオオオオン……！

勝利の雄叫び、とでも言うのだろうか。

動かない少女の体に爪が突き刺さったまま、影たちは雄叫びを上げ、少女の肉に食らいつく。

「言ったでしょ？」

彼女の頭に食らいつこうとした一匹の首が、飛んだ。
どす黒い血が四散し、返り血で顔を染めた少女が、笑う。

「首はやれない、って」

体には未だに爪が突き刺さったままだ。
そんな状態でも、少女の体は動き、意思は彼らを狩ろうとして
いる。

すると、突然少女の片手が持ち上がった。
先ほどまで消え失せていたはずの電撃は、彼女の右手に集まっ
ていた。

「アディオース☆ チキンちゃんども」

極めて明るく言い放った一言。刹那、アルスの右手から光が弾け
た。

悲鳴すら上げられないまま、次々と悪魔の右手から発せられた青
白い稲妻に貫かれ、かすかな腐敗臭とともに影たちは散って逝った。

当然のようにそれから幽霊ストリートの噂はそれから広がることもなく、単なる作り話として人々の記憶から消えていくことになる。

#005.. Overhelm-C (後書き)

とりあえず一段落しました。御意見、御感想をお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2614c/>

アラストル

2010年10月9日03時43分発行